



物入れ、インテリアにもなり女性に人気

自然素材でロマンチック 籐の棺はいかが

取締役社長小林望さんは、4年前ロンドンの業界展示会で、籐の棺に出合っピンときた。いわば大きなバスケット。とうもろこしの皮も使い、中は生成りの木綿を敷きつめた、100パーセント自然素材。花やグリーンの映える、天国を彷彿とさせる明るいイメージだ。「まさにクリスチャンにふさわしい棺だと思いました。ぜひこれを広めたいと思ったのです」

横たわれれば気分は白雪姫、という感じが人気を集めた。「今すぐほしい、小物入れにして、その後棺として使いたいという方もおられます」

まさに究極のエコだ。小林さんはこの棺で、厳粛かつ希望にあふれたキリスト教葬儀をこれからもすすめていきたいと

考えている。昨今の宗教色の薄れた家族葬や、都心部で多い式なしの直葬などの増加傾向を懸念している。

「葬儀はその方の人生を敬い、礼を尽くす場にもなる。密葬などが増えると、キリスト教の葬儀がめざす伝道につながらなくなってしまう。死を通して人は大切なことを学びます。それはかけがえのない経験です。私たちは仕事の中で日々それを実感しています」

業者のネットワークを作って、葬儀の考え方を発信していこうと考えている。学校で死に関する講演を行うなど、葬儀社だからこそできる命の尊さを伝える活動にも取り組んでいる。3万人以上の自殺者を出す社会で「自分たちが動かない」と、使命感を燃やす。

株式会社シムビオシス (SYMBIOSIS Ⅱ 共生) を立ち上げて、葬儀社に販売を始めた。価格は従来の10万円前後の棺と同程度。全国の展示会では、特に女性から絶大な支持があった。ロマ

